岩佐茂・高田純著　　脱原発と工業文明の岐路

島崎　隆（『季論21』第19号、2013年 ）

本書の帯封に、「哲学は3．11をどう受けとめるのか」とある。これは「序章」のタイトルと同じである。本書は、一般になかなかイメージされにくい哲学という学問が、3．11の大震災・大津波から発生した、原発の過酷事故という歴史的な大事件をどう把握し、展望を切り開くのかを示した力作である。

すでにこの大事故は、周知のように、マスコミの大きな話題となり、実に多くの書物や記事が書かれてきた。この大問題にたいする本書の考察のどこに一体、哲学的特徴があるのだろうか。周知のように、いままで自然科学者・技術者、政治学や経済学の専門家、広義の社会学・社会調査の専門家、評論家、ジャーナリスト、エコロジストらが、アカデミックなものから啓蒙的なものにいたるまで、多くの著述をおこなってきた。それはもう、フォローしきれないほどに本屋に並んでいる。

この点では、倫理学の立場からはすでに類書がないわけではないが、本格的な哲学からのものは、ほとんど見られないといえよう。ところで、本書のような哲学的著作の登場が遅かったのにはわけがある。哲学研究者は現地へただちに飛んで放射能測定をやれるわけでもなく、被害状況の現地調査を得意とするわけでもない。だが、おびただしいデータや言説が現れるなかで、哲学はようやく、そうした材料・情報を踏まえて、現時点でいかに考えたらいいのかを総括する。本書にはそういった意味での全体性、総合性にもとづいた幅広い観点があり、それこそ哲学の得意とするところである。

本書の問題意識の中心は、脱原発を実現するには、脱工業社会を展望する必要があるという点にある。この観点から、文明論的考察の意義、近現代の歴史発展の意味づけと人間論、日本人論批判、資本主義と工業文明への批判、科学・技術への評価、人間・自然関係など環境思想からの認識、原発コネクション批判、放射線被曝問題、資源・エネルギー問題、ドイツの脱原発の議論への注目、脱工業社会への多様な展望…、などの実に幅広いテーマが扱われる。これらの個別的なテーマにたいする専門家は別途存在するわけだが、それらを断片的にではなく、できるだけ総合的・統一的に扱おうとするところに哲学からの本書の役割があるといえるだろう。また本書の随所で見られる論点の整理も、おおむねすっきりしている。したがって、こうした総合的な観点からの考察はすぐには出現しないものと思われる。ヘーゲルの「ミネルヴァのフクロウは夕闇を待って飛びはじめる」という表現とも関係するであろうか。

そしてまた、本書は研究者ではないひとたちにもわかりやすく、啓蒙的に書かれているし、震災や原発問題を追求してきた専門家が自分の知識を整理し、再検討するためにも、おおいに役立つ著作であるという印象をもった。実際評者も、本書のおかげで、当該の問題に関して頭のなかの雑多な知識や情報がおおいに整理され、展望を与えられたという読後感をもっている。

以下、各部ごとに簡単に紹介し、そのなかで注目すべき論点を取り上げ、最後にいくつか疑問ないし要望を出したい。

序章で大きな問題提起がなされる。東日本大震災を契機に、現代の高度の工業社会について、市場経済の過熱、グローバル化、生活様式の見直しなどと絡めて、「文明論的アプローチ」から批判的に再把握したいという、本書の意図が語られる。こうした視点は著者たちによって、従来意外に少なかったとされるが、だが、これこそ哲学ならではの壮大な構想であろう。

第一部「ポスト三・一一の文明論的意味」では、三・一一と九・一一との比較、アウシュビッツ以後とヒロシマ以後の歴史などを踏まえつつ、近現代の歴史認識やポストモダンへの評価、原発文明と工業文明の転換の展望などが概括的に語られる。興味深かったのは、佐伯啓思、西部邁、西尾幹二、梅原猛、岩田靖夫、高橋哲哉、中沢新一らの多くの諸氏の多様な文明論的議論が紹介・検討されたことである。この第一部の議論は、これ以後の展開の準備的考察と見られる。

さて、豊富な内容の第二部「問われる原発依存」では、なぜ「安全神話」が振りまかれて原発にこれほどまでに固執されるのか、原発エネルギーにどう向き合うべきか、放射能汚染をどう評価し対応すべきか、などの多くの論点にたいして、的確にそれを整理し、展望を出している。たとえば、以上と関連して、同じ反原発の態度にも、①核兵器はもちろん、エネルギー源としての原発とも共存できないという立場と、②既存の原発は不可だが、安全な原発への開発は進めるべきであるという立場という、意見の別れがあるという指摘が見られる。それにたいして、本書は、エネルギーの文明論的転換の必要性の論点を正面に押し出して、前者の意見に傾いているようである。そしてそのさいに、前者の立場に立っても、レントゲンなど放射線技術は必要だし、反科学主義などに加担する必要はない、などの見解が補足される。このあたりの議論の運びは周到かつ説得的と思われるが、これは、著者たちが日頃から日本科学者会議などで専門の自然科学者・技術者たちとリアルな議論をしているからであろうと想像した。

量的にやや少ない第三部「問われる科学・技術」では、自然観や自然の支配の問題、科

学・技術の位置づけ、その意義と限界、その制御可能性の問題などが論じられる。この点では、注目すべきことに、第二部での議論とも照応して、本書は、原子力技術を従来の技術と同様に、試行錯誤を通じて段階的に改善できると考えるべきではなく、プルトニウムをほとんど生み出さないとされるトリウム燃料による溶融塩炉の開発でさえ、たとえ民主的手続きを踏むとしても、実験炉などを製造する段階から危険性が増大する以上、やはり見込みがないのではないかと主張する。実は評者は、この種の「安全な」原発の開発を進めるべきだという自然科学者の講演を聞いたことがあるが、この問題にたいする本書の議論の仕方は、多くの考慮すべき論点を踏まえていると実感した。そして、こうした主張の背後には、実はある種のエコロジー的な発想が存在するのではないかと思われる。だが、この主張は、とくに自然科学者・技術者などから多くの論議をよぶものと予想する。ここには、人間－自然観のより深い、さらなる哲学的認識も求められているといえるのではないか。

第四部「問われる工業文明」は、かなりの分量を占めており、たしかに内容的に本書の中心でもあるだろう。ここでは、疎外された工業文明や産業技術のあり方が批判され、それを支えるエネルギー政策の破綻が、とくに新自由主義による資本主義的グローバル化の問題と結合させて議論される。さらに幅広く、リスク社会、資本の利便性・効率性の問題、予防原則などのテーマにも触れつつ、また国家資本主義のもとでの「原発コネクション」のあり方が批判され、「災害ファシズム」的な状況や災害復興に含まれる問題にまで言及される。そして第四部の最後に、脱原発・脱化石燃料にもとづく工業社会とはいかなるものになるのか、いかなる環境・エネルギー革命が展望されるのかが述べられる。ここでもまた、従来議論されてきた多様な論点が取り上げられ、整理され、そのなかで本書の考えが展開されている。本書は、まず「２０５０日本低炭素社会シナリオ」の検討から始まって、脱原発と脱化石燃料の二つの課題の同時遂行を目ざすべきであるという。さらに本書は、自然と調和した工業化への道、「農」にもとづいた地産地消のエネルギー社会などを展望しつつ、バイオエタノール、グリーンプラスティック、有機エレクトロニクス、バイオミミクリなどの最新の科学・技術に言及する。最終的に本書では、マルクスによる、人間と自然のあいだの物質代謝の思想に注目しつつ、自然エネルギーによる「持続可能な循環型社会」が主張される。ところで、この第四部の最後には、疎外論的観点から、人間と自然の関係の三段階的発展論が展開されるが、これは本書でも指摘されるように、マルクス『経済学批判要綱』の歴史的三段階論に由来するであろう。

やや短い第五部「脱工業社会における共同」は、当該問題を議論するための社会哲学的・思想的基礎づけともいうべき性質をもつ。そこでは、話題になった「絆」の議論に始まり、

社会連帯（アソシエーション）と相互承認、さらに工業社会の三つの思想的柱（①主体と客体の分離、主体による客体の支配、②効用性と効率性の重視、③原子論的個人主義）の摘出などの問題が話題豊富に扱われる。「おわりに」で著者二人の立場の差異の問題も語られるが、それでも本書は、かなり統一のとれた共同著作となっているといえるだろう。なお本書では、二人の執筆者の分担が明示されている。

本書にたいする疑問や要望を以下に述べたい。脱原発の困難性にたいして、電力不足の問題が口実に挙げられたが、この点で、大量生産の必要性のもとに、大量消費の問題が指摘されるであろう。企業側の言い分として、それが環境に悪いといっても、「お客さまがご要望ですので」というようなことがしばしば指摘される。事故後に節電が大規模に実施されたが、こうして、われわれ国民のライフスタイルの変革の問題が提起されないと、電力やエネルギー問題は究極的に解決されない。第一の疑問は、ライフスタイルの意図的変革というテーマは本書ではそれほど指摘されていないので、この点をどう考えたらいいのだろうかという問題がある。さらに、上記の問題と関わって第二にお聞きしたいのは、現在メタンハイドレートやシェールガスなど新エネルギー源への期待が高まっているが、もしかりに新資源や新科学・技術の開発によって、当面、資源・エネルギー問題が心配される必要が無くなったと仮定した場合、われわれは節電や自然資源の消費問題にこだわる必要がないといえるだろうか、ということである。功利主義的に考えれば、もちろんそうなるだろう。だが、本書では功利主義などは明確に批判されている…。

第三は、本書では脱工業社会の新文明が提起されたが、だが、この将来社会も「もうひとつの」工業社会であるといわれるとすれば、この工業社会はいかなる具体的形態（経済的・社会的制度）をもつのかという問題である。第四部で多様にその展望が語られたが、来るべき社会のまとまった具体的展望はかならずしもはっきりしていないようである。すでに本書では、マルクスに何回か言及されたが、もしマルクスを踏まえるとするならば、将来社会とは、何らかのエコロジー的社会主義ということになるだろう。すでに本誌『季論21』でも、社会主義論が議論されてきた。とはいえ、これらのテーマは、当該問題に関心をもつわれわれ自身が引き受けなければならない問題であろう。

いずれにせよ、多様な問題を含めて総合的に展開し、そのうえでどう考えるべきかを提起した本書を、大震災に発した原発問題に関心をもつ人びとにはもとより、広く現代日本の現実や人間の生きかたについて考えている人びとにも是非とも推薦したいと思う。

（大月書店、２０１２年８月　　版、２４００円）